



Title	上博楚簡『申公臣靈王』の全体構造
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 269-279
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上博楚簡『申公臣靈王』の全体構造

草野友子

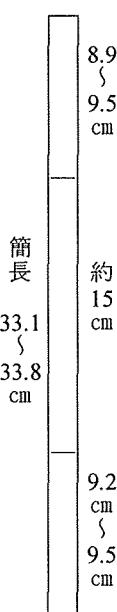
本稿は、『上海博物館藏戰國楚竹書（六）』（馬承源主

編、上海古籍出版社、二〇〇七年七月。以下、上博楚簡と称す）（注¹）所収の『申公臣靈王』を取り上げ、文献全体を釈讀した上で、その全体構造を明らかにするものである。

一、釈讀

まず、本篇の書誌情報を確認しておこう。

「釈文考釈」（以下、原釈文）の担当者は、陳佩芬氏である。『申公臣靈王』は『莊王既成』との合篇であり、竹簡は全九簡、前篇『莊王既成』の末尾句と後篇『申公臣靈王』の冒頭句は第四簡にあり、墨釘によつて分割されている。全て完簡。簡長は三十三・一～三十三・八cm。編綫は兩道。右契口。簡端は平齊。図示すると次のよう



になる。

篇題はなく、内容によつて名付けられた仮称である。総字数は百十七字。全て完簡であるため、通読できる。最終簡（第九簡）には、墨釘と留白があり、本篇の文末であることを示している。

陳佩芬氏は本篇の内容について、「楚の王子回（匱）と申公とが王位を争い、その結果、申公が「君王の臣」となることを願つた」と説明しているが、實際は、楚の王子回（後の靈王）と陳公子皇（穿封戌）との間に起つた、捕虜（鄭の皇頃）をめぐる争いに關する文献である。以下、「凡例」「原文」「釈文」「訓讀」「和釈」「語注」

の順に掲げる。

【凡例】

- ・「へ」内の算用数字は、竹簡番号を示す。(『莊王既成』との連番のため、第四簡から第九簡までとなつてゐる。)
- ・「原文」は、原訛文の隸定・句読点に従つてゐる。「訛文」以降は文字を新字に改め、句読点については筆者の意見を反映させてゐる。

- ・「訛文」は、原訛文と異説とを参考にして、筆者が最終的に確定したものを探載してゐる。
- ・「和訛」中の()は、その直前の語句や内容に関する補足説明等を行つたもの、「」は、筆者が文意を明らかにするために語句を補つたものである。
- ・「語注」には、紙幅の都合上、筆者が重要と判断した説のみを掲載する。諸氏の説を提示する際には、その氏名のみを掲げる。論文・札記の題目、掲載年月日等についても、本稿末尾の「参考文献」に列記してゐる。
- ・「」は墨鉤を示す。

【原文】

戥於析述、縉公子皇晉皇子。(4)王子回激之縉公爭之、王子回立爲王。縉公子皇見王、王曰、「縉公(5)忘夫析

述之下虐。」縉公曰、「臣不智君王廬爲君、女臣智君王(6)之爲君、臣廬或至安。」王曰、「不穀曰夫縉公、氏言棄之、含曰(7)縉公事不穀、必曰氏心。」縉公名拜、退會、「臣爲君王臣、君王卒之(8)死、不曰晨欽壇、可敢心之又。」

』(9)

【訛文】

禦於棘遂、陳公子皇囚皇子。王子圉辱之、陳公爭之。

王子圉立爲王。

陳公子皇見王。王曰、「陳公忘夫棘遂之下乎。」陳公曰、「臣不知君王之將爲君。如臣知君王之爲君、臣將有致焉。」王曰、「不穀以笑。陳公是言棄之。今日陳公事不穀、必以是心。」陳公跪拜、起答、「臣爲君王臣。君王免之死、不以振斧質。何慊心之有。」

【訓読】

棘遂に禦かせがれ、陳公子皇皇子を囚とう。王子圉之を辱むわんとし、陳公之を争う。

王子圉立ちて王と爲る。

陳公子皇王に見ゆ。王曰く、「陳公夫の棘遂の下を忘れんか。」と。陳公曰く、「臣君王の將に君と爲らんとするを知らず。如し臣君王の君と爲るを知れば、臣將

に致すこと有らん。」と。王曰く、「不穀 以て笑わん。陳公 是の言 之を棄てよ。今日より陳公は不穀に事うるに、必ず是心を以てせよ。」と。陳公 跪きて拝し、起ちて答う、「臣 君王の臣為り。君王 之が死を免じ、以て斧質を振わず。何ぞ慊心 之れ有らん。」と。

【和訳】

〔楚は鄭の城廻に進軍したが、鄭の皇頃に〕棘遂で防御されたので、陳公子皇（穿封戌）は皇子（鄭の皇頃）を囚えた。〔楚の〕王子匄は〔これ（皇頃）〕を奪おうとし、陳公子皇は〔これ（皇頃）〕を〔王子匄と〕争つた。

〔六年後、〕王子匄は立つて王（靈王）となつた。

〔さら〕に七年後、陳公子皇は王に謁見した。王は言つた、「陳公はあの棘遂の一件を忘れたのではないだろうな。」と。陳公は言つた、「臣（私、陳公）は〔當時、〕君王が国君となるうとしていることを知りませんでした。もし私が君王が国君になると知つていれば、私はまさに〔あなたを死に〕至らせたことでしょう。」と。王は言つた、「私は笑おうではないか。陳公はこの言を棄てよ。今日から陳公は私に事えるのに、必ず良き心をもつてせよ。」と。陳公は跪いて拝し、立つて答えた、「臣（私、陳公）は君王の臣下です。君王は〔これ（私）〕の死を免じ、斧質

（刑具）を振わずにいてくださいました。どうして不満の心がありましょか。」と。

【語注】

（1）戇於析述

原訳文では、「戇」を「吾」と訳読み（「戇公周童耳」（包山楚簡・第一三・四簡））、「析」は地名であり（「秦人過析」（『左伝』僖公二十五年伝）、「析、楚邑、一名白羽」（杜預注））、今の河南省内郷県西北に当たるとする。

一方、陳偉氏は「戇」は「禦」と読みのではないかと指摘する。また、「析」は「朸」であるとし、本篇は楚の靈王と穿封戌とに関する故事であることから、城廻あるいは城廻一帯の地名であるうと推測している。李学勤氏も「戇」を「禦」と訳読みする。何有祖氏は「戇」と隸定し、陳劍氏が『三德』第十七簡で「戇」を「禁」と訳読みするため、「禁」であるとする。また、「朸」を「棘」と読み（「如矢棘斯」（『詩經』小雅・斯幹）、「棘々（中略）」：『韓詩』作朸。）（『經典訳文』毛詩音義）、「述」は楚簡中に「遂」と読みの例が多く見られることから、「遂」と訳読みする。凡國棟氏は、何有祖氏に従い、「朸」を「棘」と、「述」を「遂」と訳読みし、「棘遂」という地名であるとする。そして、『左伝』襄公二十四年に「楚子伐鄭以救

斉、門於東門、次於棘沢。」とあることから、鄭の東門に
ある「棘沢」である可能性を指摘する。

この箇所は、原訛文の解釈では文意が不明である。「戦」
については、何有祖氏が指摘するように、字形から「戦」
と隸定することができる。また、楚簡中には、「戦」を「敵」
と訛読する例も見られる（『從政（甲）』第十七簡）。さ
らに、『説文解字』に「敵、禁也。从支吾声。」、その段
玉裁注に「与圉・禦音同。……（中略）……則敵為禁・禦本
字、禦行敵而廢。」とあることから、「敵」は「禦」と訛
み替えることが可能である。従つて、「敵」と隸定し、「禦」
と訛読する。『左伝』襄公二十六年伝に「楚子、秦人、侵
吳、及雩婁。聞吳有備而還、遂侵鄭。五月、至于城麇。
鄭皇頃成之、出与楚師戰、敗。穿封戌囚皇頃。公子圉与
之爭之。」とあり、楚が鄭に侵入した際、鄭の皇頃が城麇
を守つたと記載されていることから、「禦」は「ふせぐ」
の意味で解釈する。

「折述」については、『左伝』襄公二十六年伝の記述を
踏まえると、城麇あるいはその付近の地名である可能性
が高いが、それに相当する具体的な地名は未詳である。
ここでは、何有祖氏・凡国棟氏の解釈に従つて「棘遂」
と訛読する。

（2）縉公子皇晉皇子

原訛文は、「縉公」を「申公」として、春秋時代の楚の
屈巫申に封じられた、巫臣または申公巫臣（字は子靈）
のことであるとする。また、「首」を「首」と訛読し、「皇
首皇子」は第一子の皇子である申公のことを指すとする。
そして、申公は楚の莊王・共王の時から政治的影響があ
つた人物であり、本篇は申公と王子圉とが王位を争つて
いるという内容であると述べる。

一方、陳偉氏は、「申」を「陳」と訛読する（郭店楚簡
『緇衣』第十九簡・第三十九簡や、上博楚簡『緇衣』第
十簡・第二十簡に見える「君陳」の「陳」は「申」に従
つて作られているため）。そして、「陳公」とは穿封戌の
ことであり、「子皇」の「皇」とは穿封戌の字であるとす
る。さらに、「皇子」は鄭の皇頃を指すと述べる。また、
「晉」は「止」であり、『左伝』襄公二十六年の事件が背
景にあることを指摘して、「囚」ではないかと推測する。
沈培氏は「晉」は「戴」であり、「得」（捕獲の意）と訛
読している。

陳偉氏が指摘するように、本篇は『左伝』襄公二十六
年の事件について記載されたものであり、原訛文は誤つ
た解釈を提示している。穿封戌は、楚軍を従えて鄭を侵
略し、城麇で皇頃を囚えた。その際、王子圉（後の靈王）
と皇頃をめぐつて争い、その結果、穿封戌が敗れ、王子

匱が捕虜である皇頃を連行した。後に、穿封戌は靈王によつて陳の県尹に任命された（詳細は、第二章にて後述）。この箇所は、陳公（穿封戌）が皇頃を捕らえた場面であるため、陳偉氏の解釈に従つて「陳公子皇囚皇子」と釈読した。

（3）王子回匱之

「王子回」とは「王子匱」、すなわち春秋時代の楚の王である靈王を指す。楚の共王の次子で、康王の弟。『史記』楚世家によると、王子匱は王に即位した後に諸侯の兵力をもつて吳を攻め、朱方を破り、斉の慶封を殺し、後に陳・蔡を滅ぼした。また、徐を攻めて吳を脅し、人々は夫役に苦しんだ。公子比や公子棄疾らは太子祿を攻め殺し、公子比を立てて王としたため、靈王の軍は動搖し、戦わぬうちに破れた。そして、靈王は乾谿より西に逃げ、芋尹の申該の家で死亡した。在位、前五四〇（前五二九）。

「匱」については、原釈文は「奪」と釈読し（「強取也。」『説文解字』支部）、「此是争匱正字、後人假「奪」行而「匱」廢。」（段玉裁注）、「奪之」とは楚の国君の位を奪い取つたことを指すとする。

「匱」を「奪」と釈読することには従うが、この箇所は、王位の争奪ではなく、王子匱（靈王）と陳公子皇（穿

封戌）による皇頃（捕虜）の争奪について書かれていることから、原釈文の解釈には従わない。

（4）縉公子皇見王

原釈文は、「皇」を「惶」と釈読し、憂い恐れるの意であるとする（「惶、恐也。从心、皇声。」『説文解字』心部）、「惶、懼也。」（『広雅』釈詁）。しかし、前述の通り、これは「陳公子皇」という人名であるため、原釈文の解釈には従わない。

（5）縉公忘夫析述之下廬

「析述」は、前述の通り、「棘遂」（地名）と釈読する。「」での「下」とは、棘遂の一件のことを指すと推測される。

（6）臣廬或至安

原釈文は、「或」は未定の辞（「殷其弗或乱正四方。」『書經』微子）、「或者、不定之辭。」（孔穎達疏）、「或言二百余歲」（『史記』老莊申韓列伝）、「或、疑辭也。」（『史記』正義）、「至安」は「致焉」（普通）であるとして、「臣將或致焉」と釈読する。

一方、陳偉氏は、「或」を「有」、「至安」を「致焉」と釈読し、「臣將有致焉」とする。そして、「致」とは『左伝』昭公八年伝の記述（「若知君之及此、臣必致死礼以息楚。」）にある「致死」の意味であると述べる。

この箇所については、『左伝』昭公八年伝に、「使穿封

戌為陳公曰、「城麇之役不詔。」侍飲酒於王。王曰、「城

麇之役、女知寡人之及此、女其辟寡人乎。」対曰、「若知

君之及此、臣必致死礼以息楚。」とあり、本篇はこれに

関連する事柄であることから、陳偉氏の解釈に従つて「臣

將有致焉」と釈讀する。

(7) 氏言棄之

原釈文は、「氏」と「是」とは音通することから、「氏言」を「是言」と釈讀する（「氏、假借為是。」（『説文通訓定聲』））。また、「棄之」は、廃するの意であるとする（「水官棄矣。」（『左伝』昭公二十九年伝）、「棄、廢也。」（杜預注）、「棄稷弗務。」（『國語』周語上）、「棄、廢也。」（韋昭注））。この解釈に従う。

(8) 必曰氏心

原釈文は、「氏心」を「是心」と釈讀し、良き心の意であるとする（「其所是焉誠美。」（『荀子』富國）、「是、善也。」（楊倞注）。「氏」と「是」とは音通することから、この解釈に従う。

(9) 繕公全拜

原釈文は、「全」を「坐」と釈讀する（「先生書策琴瑟在前、坐而遷之。」（『禮記』曲礼）、「坐、通名跪。跪名不通坐也。」（孔穎達疏））。そして、「拜」は、「跪」の意

であるとする（「跪、拝也。从足、危声。」（『説文解字』足部）。

一方、陳偉氏は、「全」は「危」と釈讀でき、「跪」の

本字であると指摘する。

陳偉氏が指摘するように、「全」は楚系文字上で「危」と釈讀できる字形であるから、「陳公跪拝」と釈讀する。

(10) 不曰晨釤莖

原釈文は、「不以辰扶步」と釈讀とする。「釤」は「鉄」の仮字であり、「扶」であるとする（「扶、左也。从手、夫声。」（『説文解字』手部））。「莖」は包山楚簡で「歩」とされていることから、「歩」とし（「歩、行也。」（『説文解字』止部））、「扶步」とは「扶行」のことであると述べる。

一方、陳偉氏は、「晨」は「辱」の誤写で、謙讓の言葉ではないかと指摘する。「釤」については「斧」もしくは「鉄」と、「莖」については上博楚簡『周易』第四簡と上博楚簡『慎子曰恭儉』第一簡に見える字であることを指摘して、「質」と釈讀する。「斧質」「鉄質」とは、古代の刑具を指す。何有祖氏も陳偉氏の解釈に従い、「斧質」と釈讀し、さらに「質」は「鑽」である可能性も指摘する。「斧鑽」とは、斧と枕木のことと、刑が執行される時に人を枕木の上に乗せ、斧で切り落とすという古代の刑

具である。「寡君是事畢矣、嬰無斧鎗之罪、請辭而行。」

（『晏子春秋』問下）、「孰與身伏質、妻子為戮乎。」（『漢書』項籍伝）、「質謂鎗也。古者斬人、加於鎗上而斫之也。」

（顏師古注）。また、「晨」は「震」あるいは「振」と読める」とを指摘する（「夫兵戢而時動、動則威。觀則玩、玩則無震。」（『國語』周語下）、「震、振也、興也。」（王引之『經義述聞』国語下））。そして、「震斧鎗」とは陳公に対し斧鎗の刑を施すことによって威勢を振るう、という意味であるとする。楊沢生氏は、「脣斧鎗」の主語は「臣」（陳公）であるから、おそらく「伏」の字のようなものであると指摘する（「遂伏斧鎗、曰、命在君。」（韓詩外伝））。金克兀氏は、「脣」と隸定し、「抵斧鎗之罪」という語が伝世文献に見えることから、「抵」と釈読し（「臣不佞、不能奉承先王之教、以順左右之心、恐抵斧鎗之罪、以傷先王之明、而又害於足下之義、故遁逃奔趙。」（『戦国策』燕策）、「伏」のよな意味であるとして、この句の主語を「君王」（すなわち靈王）と解釈する。

原訳文の解釈では、文意が不明である。ここでは、何有祖氏に従つて「晨」を「振」と、陳偉氏・何有祖氏に従つて「釵堯」を「斧質（鎗）」（腰切り・銅切りをするための刑具）と釈読し、「不以振斧質（鎗）」とは靈王が穿封戌に対して斧質（刑具）を振るわなかつた（处罚し

なかつた）、と解釈する。

（11）可敢心之又』

原訳文は、「何敢心是有」として、「どうして敢えて不善の心があるうか」という意味であると解釈する。

一方、郝士宏氏は、「敢」は「侵犯」「冒犯」の意（「敢犯也。」（『広雅』釈詁））、あるいは「險」と読んで、「險心」（陰險な下心）を指すのではないかと述べる。李学勤氏は、「何敢心之有」の「心」とは、争奪の心か、あるいは「心」の上に脱字が一字あるのではないかと指摘する。楊沢生氏は、「敢」と「慊」とが普通することから、「慊」と読むべきではないかとする。「慊」とは不満の意味であり、「慊心」とは満足していない心のことを指す（「曾子曰、『晋楚之富、不可及也。彼以其富，我以吾仁。彼以其爵，我以吾義，吾何慊乎哉。』」（『孟子』公孫丑下）、「慊、少也。」（趙岐注）。

ここでは、穿封戌が靈王の許しを得たことに対する穿封戌の発言箇所であり、「敢」と「慊」とが普通することから、楊沢生氏の解釈に従つて「何敢心之有」と釈読した。

「」は、文末を示す墨鉤。下に留白があるため、篇末であることを示している。

二、全体構造

本篇は一見、短い文献であるが、本篇を理解するためには、その背景をおさえておく必要がある。本篇は、『左伝』と对照させることにより、その全体像が見える文献である。そこで、以下、『左伝』との対照表によつて、本篇の内容とその全体構造を明らかにしていきたい。

【対照表】

『左伝』	『申公臣靈王』
<p>(襄公二十六年伝)「前五四七」</p> <p>①楚子、秦人、侵吳、及雩婁。聞吳有備而還。遂侵鄭。五月、至于城麇。鄭皇頡戍之。出與楚師戰。敗。穿封戌囚皇頡。公子圉與之爭之。</p> <p>②正於伯州犁。伯州犁曰、「請問於囚。」乃立囚。伯州犁曰、「所爭、君子也、其何不知。」上其手曰、「夫子為王子圉、寡君之貴介弟也。」下其手曰、「此子為穿封戌。方城外之县尹也。誰獲子。」囚曰、「頡遇王子弱焉。」戌怒、抽戈逐王子圉、弗及。楚人以皇頡帰。</p>	<p>A 禦於棘遂、陳公子皇囚皇子。王子圉奪之、陳公爭之。</p>

<p>(昭公八年伝)「前五三四」</p> <p>④使穿封戌為陳公曰、「城麇之役不諂。」侍飲酒於王。王曰、「城麇之役、女知寡人之及此、女其辟寡人乎。」對曰、「若知君之及此、臣必致死礼以息楚。」</p>	<p>B 王子圉立為王。</p>
<p>D 王曰、「不穀以笑。陳公是言棄之。今日之下乎。」陳公曰、「臣不知君王之將為君。如臣知君王之為君、臣將有致焉。」</p>	<p>C 陳公子皇見王。王曰、「陳公忘夫棘遂</p>

まず、①～④の内容を確認しよう。

①楚子（楚の康王）と秦人が吳を攻めようとして雩婁に行つたが、吳には固い備えがあると聞いて引き返し、鄭を攻めた。五月に鄭の城廬に進軍したところ、鄭の大夫である皇頽がそこを守っていた。皇頽は自ら出向いて楚軍と戦うも、敗北。皇頽は楚の穿封戌によつて捕えられるが、皇頽をめぐつて穿封戌と楚の王子匱（後の靈王）とが争うこととなる。

そこで、②伯州犁は、捕虜である皇頽を証人として立てたせた。伯州犁は皇頽に、「争つているどちらも君子であり、それをどうして知らないことがあるか。」と言い、手を上に上げて「あの方は王子匱であり、王（康王）の弟君である」と、手を下に下げて「こちらは穿封戌であり、方城外の県尹である。どちらがお前を捕らえたのか。」と言つた。すると皇頽は、「自分は王子匱に会つて捕えられた」と述べた。穿封戌は立腹し、戈を抜いて王子匱を追いかけたが、追いつかなかつた。そうして楚人は皇頽を連れ帰つた。

③は、①・②の六年後のことである。冬、楚の王子匱は鄭を聘問しようとして、伍举はその補佐をした。そして、まだ国境を出ないうちに楚王が病気になつたと聞いて王子匱は引き返し、伍举はそのまま鄭を聘問した。十一月

己酉の日、王子匱は王宮に戻り、病氣について問うふりをして王の首を絞めて殺し、王の二子である幕と平夏をも殺害した。これにより、右尹の子干（公子比）は晋に出奔、宮厩尹の子晳（公子黒肱）も鄭に出奔した。王子匱はさらに太宰の伯州犁を鄭で殺害し、楚王の亡骸を鄭に埋葬して郊教と名付けた。王の死を鄭に告げさせると、鄭に使いに行つていた伍举が使者に對して、後繼者の名を尋ねた。すると使者は「寡大夫匱」と答えたため、伍举はそれを改めて「共王の子の匱が年長である」と言つた。

そして、ついに王子匱が楚の靈王として即位し、薳罷を令尹に、薳啓彊を太宰に任命した。

④は、さらにその七年後の出来事である。楚の靈王は穿封戌を陳の県尹に任命し、「お前は城廬の役の時に詔わなかつた」と言つた。そして、酒宴が開かれ、靈王が穿封戌に對して「城廬の役の時、私が王となることを知つていれば、お前は私に功績を譲つたであろう。」と言つた。穿封戌は「もしわが君が今日のようになると知つていれば、私は必ず王を死に至らせ、礼を守つて楚の国を安定させることでしよう。」と答えた。

以上が『左伝』に記載されている内容である。では、『左伝』と『申公臣靈王』との相違点はどのようなもの

であろうか。

まず、『申公臣靈王』では、**A**のように、冒頭に王子団（靈王）と陳公（穿封戌）とが捕虜である皇子（皇頃）をめぐつて争つたことが記載されているが、その詳細は書かれていない。それは楚において常識的な話、すなわち読者に共有されていた著名な話であったからであろう。

また、本篇では捕虜の皇頃のその後についても書かれておらず、これも周知の事実であつためだと考えられる。

捕虜となつた皇頃の争奪を行つた地については、『左伝』では「城麇」となつており、本篇では「棘遂」となつてゐる。語注（1）で示したように、「棘遂」は城麇あるいはその付近の地名と考えられるが、「棘沢」であると可能性もある。『左伝』襄公二十四年伝には、「冬、楚子伐鄭以救齊、門于東門。次于棘沢。諸侯還救鄭。」とあり、楚軍が鄭の東門を攻め、鄭の棘沢に軍を留めたという事件が記されている。棘沢の事件が襄公二十四年、城麇の事件が襄公二十六年であり、年代と場所とが接近しているために混同して書かれた可能性も考えられる。

Bについては、王子団が王に即位したという極めて簡潔な記載のみで、③のような詳細は一切書かれていない。④では、穿封戌は靈王に詔わないと、一貫した態度を示している。穿封戌は、靈王が王となるのを知つて

いれば、城麇の事件の時に靈王を死に至らせ、楚の国を安定させたという過激な発言をする。**C**においても、穿封戌は靈王に対し④と同様の発言をしている。ただし、『左伝』の記述はここで終わり、その結末は書かれていないのに對し、『申公臣靈王』では、靈王の反応とそれに対する穿封戌の発言が記されている。

Dにおいて靈王は、過去の出来事は笑つて水に流そうと穿封戌をなだめて、良き臣下として仕えるよう促す。すなわち、寛大な態度で接する靈王の姿が描かれているのである。そして、それを聞いた穿封戌は態度を翻し、自身に對して刑罰を下さなかつた靈王の臣下となることを表明する。つまり、**D**では靈王と穿封戌とが和解する場面が描かれているのである。これは、本篇の特色であると言えよう。

以上、本篇の内容と、その全体構造が明らかとなつた。本篇の前半部分については、靈王と穿封戌とに関する事柄について極めて簡潔に記載されていた。詳細を省略しているのは、本篇が楚の人の手によつて書かれた楚の在地性文献であり、読者にとつて周知の事実であつたからであろう（注2）。また、本篇の後半部分には、伝世文献には描かれていない靈王と穿封戌との問答が記されている。すなわち本篇は、靈王と穿封戌との関係を映し出す、重

要な一資料であると言えるのである。

注

(1) 上博楚簡の書写年代については、周知の通り、一二一五七士六五年前という中国科学院上海原子核研究所の炭素十四の測定値が紹介されている（「馬承源先生談上海簡」、『上博館藏戰國楚竹書研究』、上海書店出版社、二〇〇一年）。一九五〇年を定点とする国際基準に従えば、前三〇八士六五年、すなわち前三七三年から前二四三年となり、下限は秦の將軍白起が郢を占領した前二七八年となる可能性が高いことから、書写年代は前三七三年から前二七八年の間と推定される。

(2) なお、一〇〇九年八月現在までに公開された上博楚簡中の楚の在地性文献は、『昭王殿室』『昭王与襄之牋』『東大王泊』『莊王既成』『申公臣靈王』『平王問鄭侯』『平王与王子木』『鄭子家喪』『君人者何必安哉』の九篇である。

【参考文献】

■「簡帛網」(<http://www.bsm.org.cn/>)

・陳偉「讀《上博六》條記」、一〇〇七年七月九日。

・何有祖「讀《上博六》札記」、一〇〇七年七月九日。

【付記】本稿は、平成二十一年度日本学術振興会・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

・凡国棟「讀《上博楚竹書六》記」、一〇〇七年七月九日。

・沈培「試訛戰國時代从“之”、从“首”（或从“貢”）之字」、二〇〇七年七月十七日。

・郝士宏「初讀《上博簡（六）》」、一〇〇七年七月二十一日。

・楊沢生「讀《上博（六）》劄記（三則）」、一〇〇七年七月二十四日。

・范常喜「讀《上博（六）》札記六則」、一〇〇七年七月二十五日。

・劉信芳「說穿封戌之“心”」、一〇〇七年八月二十一日。

■「清華大學簡帛研究」

・范常喜「讀《上博（六）》札記六則」、一〇〇七年七月二十一日。

・李學勤「讀上博簡《莊王既成》兩章筆記」、一〇〇七年七月十六日。

■「簡帛研究」(<http://www.jianbo.org/>)

・張崇礼「讀《莊王既成 申公臣靈王》劄記」、一〇〇七年八月七日。

■「復旦大學出土文献與古文字研究中心」

・金克凡「關於《上博六·申公臣靈王》“不以斧脣質”的猜想」、<http://www.guwenzhi.com/Default.aspx>

一〇〇八年一月十四日。